

「業務用米の取組結果と次年度技術対策」

1 はじめに

県内では、27の経営体で、5品種で29か所（つきあかり11か所、ゆきん子舞5か所、あきだわら10か所、ちほみのり2か所、みずほの輝き1か所）の実証ほを設置し、業務用米等の多収穫栽培に取り組めました。

そこで、取組結果と課題を踏まえた次年度の技術対策についてご紹介します。

2 令和元年度の取組結果

(1) 施肥の概要

- 施肥量は基肥全量施肥を計画していたほ場においても生育に応じて追肥が行われるなど、指標値並からそれ以上に施用されました。

品種名	年度	施肥体系	窒素成分施用量(kg/10a)					計
			基肥	中間	穂肥1回目	穂肥2回目	穂肥3回目	
つきあかり	本年値	分 施	11.0		1.9	1.7		13.0
	平30年		9.0	0.1	1.7	0.5	0.4	11.7
	指標値		7.0		3~4	2~3		13.0
ゆきん子舞	本年値	分 施	10.1	1.2	2.3	2.4		14.8
	平30年		10.0		1.9	1.4		13.3
	指標値		7.0		3~4	2~3		13.0
あきだわら	本年値	分 施	11.3	2.8	2.1	2.5	2.3	15.7
	平30年		10.1	1.6	2.5	2.9	1.0	14.3
	指標値		7.0		3~4	2~3		13.0
ちほみのり	本年値	分 施	11.0		2.6			13.5
	指標値		7.0		3~4	2~3		13.0
みずほの輝き	本年値		12.0		1.4	1.4		14.8

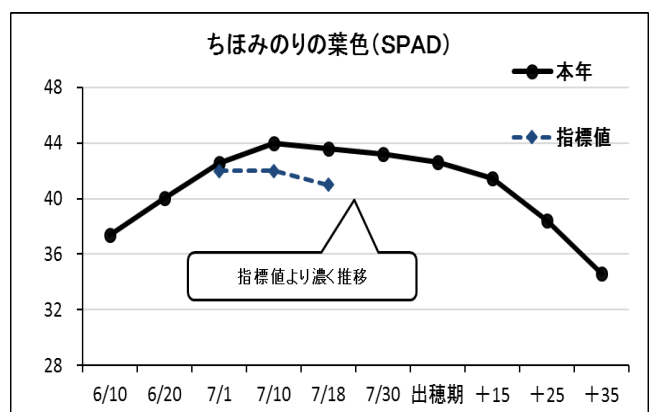
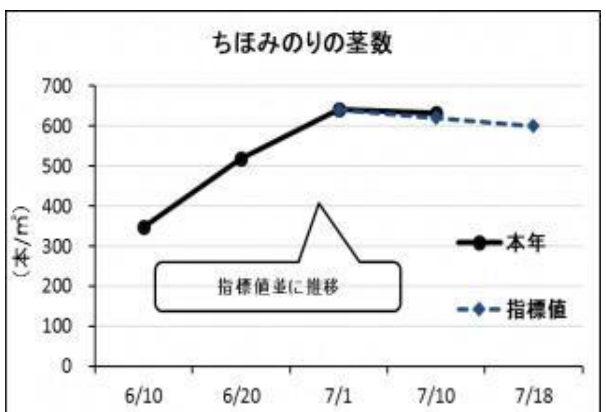
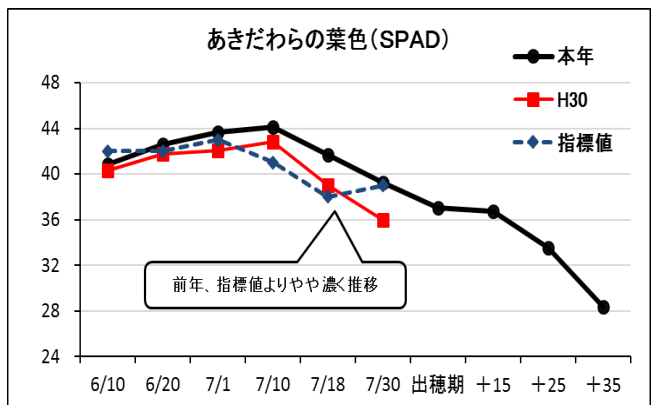
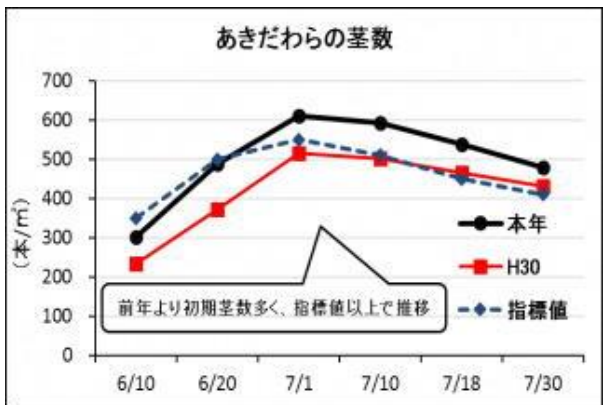
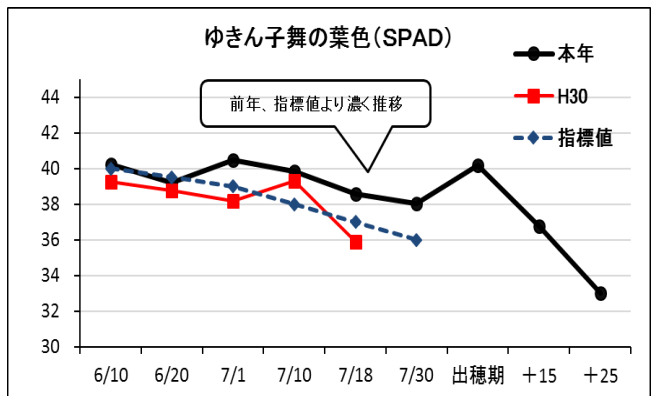
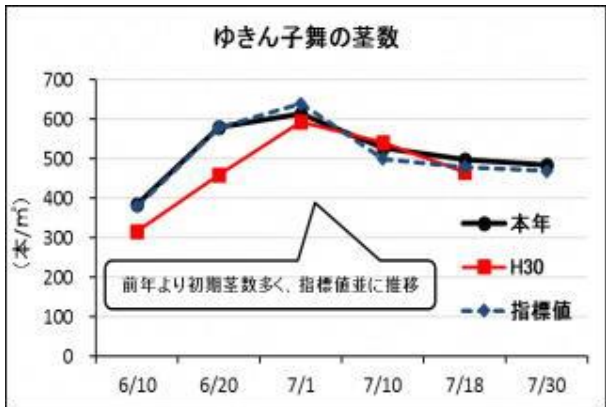
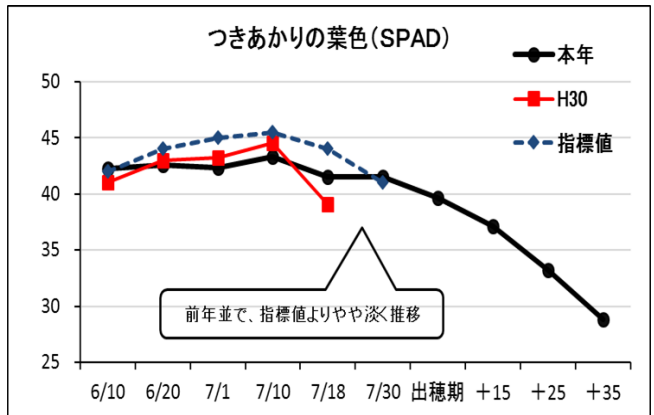
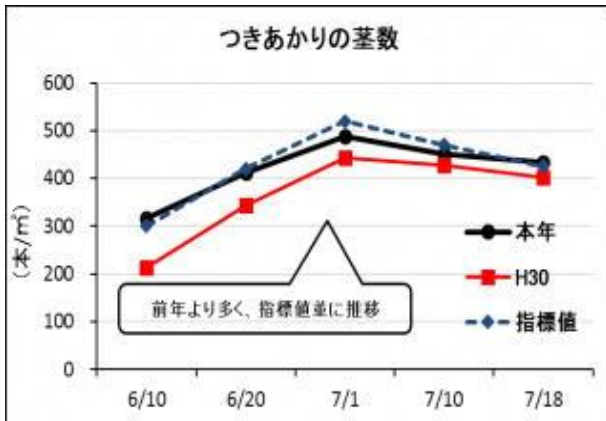
(2) 主な生育ステージ

- 田植え時期は5月上旬の前年並で適期に行われましたが、一部で指標値より遅い田植えが見られました。
- 栽植密度は18株/m²以上で、茎数確保に向けた取組が行われました。

品種名	年度	播種月日 (月/日)	田植月日 (月/日)	栽植密度 (株/m ²)	最高分けつ期 (月/日)	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	倒伏程度
つきあかり	本年値	4/10	5/8	20.1	6/28	7/24	8/30	75	19.0	1.3
	平30年		5/6	20.2	6/29	7/23	9/1	77	19.5	1.0
	指標値		5月上旬	18株以上	6/29頃	7/24頃	9/1頃	78		
ゆきん子舞	本年値	4/9	5/4	19.2	6/26	7/23	8/25	85	19.2	1.1
	平30年		5/6	19.3	6/28	7/24	9/2	86	20.2	1
	指標値	4/15頃	5月上旬	18株以上	6/27頃	7/25頃	8/31頃	85		
あきだわら	本年値	4/11	5/7	18.9	7/1	8/8	9/28	84	20.8	0.4
	平30年		5/9	18.0	6/30	8/13	10/4	84	19.7	0.2
	指標値	4/20頃	5月中旬まで	18株	7/1頃	8/12頃	9/28頃	87		
ちほみのり	本年値	4/5	5/1	20.3	7/9	7/20	8/24	65	18.0	0.5
	指標値		5月上旬	18株	6/28頃	7/21頃	8/26頃	72		
みずほの輝き	本年値	4/13	5/5	18.0	7/10	8月10日	9/22	88	20.3	0

(3) 生育

○ 生育は施肥量や田植え時期、栽植密度の設定等、生育初期から茎数を確保する栽培管理が適正に行われた結果、田植え後の好天もあり、指標値並の茎数の確保と葉色の維持に結びつきました。



(4) 収量及び品質

- 坪刈り収量は20経営体が自身の目標を上回り、県の目標と同程度の高い収量レベルを確保することができました。ただし、実収では目標を確保した経営体は3経営体と少なく、収量のは場間差があると考えられました。
- 整粒はゆきん子舞、みずほの輝きが1当相当の70%台を確保しましたが、他の3品種は低く品種による差が見られました。登熟歩合の向上が必要と思われました。

品種名	年度	穂数 (本/㎡)	一穂粒数 (粒)	㎡粒数 (粒/㎡)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	収量(kg/10a)			整粒歩合 (%)
							目標	実収	坪刈	
つきあかり	本年値	372	89	32,896	77	23.5	652	601	669	55
	平30年	365	94	34,268	83	24.2	648	558	638	66
	指標値	400	85	34,000	80~82	24.0	660			
ゆきん子舞	本年値	459	80	36,844	83	22.2	654	629	713	74
	平30年	415	78	33,608	83	23.3	636	621	670	72
	指標値	470	77	36,000	88~90	22.3~23.0	720			
あきだわら	本年値	432	98	42,328	75	21.8	682	625	698	52
	平30年	387	99	38,460	80	22.0	674	607	676	63
	指標値	350~370	96~104	36,000	90	22.0~22.5	720			
ちほみのり	本年値	593	67	40,070	78	21.3	675	608	735	63
	指標値	470	77	36,000	88~90	22.3~23.0	720			
みずほの輝き	本年値	490	77	37,730	82	24.7	720	706	760	72

3 次年度技術対策

(1) 土づくりの実施

- 多収穫栽培では土壌養分が収奪されやすいので、稲わらの秋すき込みや堆肥・土づくり資材・籾殻を積極的に施用
- 十分な粒数を確保するための、根の健全な発達を促す耕深15cmを確実に確保
- ほ場マップを作成し、地力や用水状況等、ほ場の特性に合わせた施肥設計を実施

(2) ㎡当たり粒数（目標穂数）の安定確保

- 稚苗は20日間程度の育苗日数となるよう、田植え時期に合わせた適期播種の実施（健苗育成）
- 移植前の確実な追肥（べんとう肥）
- 品種特性に合わせた安定した茎数が確保できる田植え時期と栽植密度の設定
 - ・ 田植えは、5月上旬をめやすに遅れずに実施（早生品種は生育量の早期確保）
 - ・ 晩生品種「あきだわら」は、コシヒカリの前の田植え（登熟温度の確保）
 - ・ 栽植密度は、18株/㎡（60株セット）以上をめやすに、不足しないように設定
- ほ場条件（高地力、大豆あと、基盤整備直後など）と地域のめやすに基づいた基肥窒素量の施用

(3) 追肥や水管理による後期栄養の確保と登熟の促進

- 出穂期の目標葉色値を確保する追肥・穂肥の実施（全量基肥施肥も同様）
- 出穂後25日まで（可能であれば30日まで）の飽水管理の徹底による登熟期間の稲体の活力維持

業務用米等の多収穫栽培の取組は、所得確保とコスト低減が可能であり、作期分散によるフェーン等に遭遇するリスクの低減も図られます。令和2年産米の多収穫に向けて、良質茎を早期に確保するための育苗や田植えに取り組んでください。